

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02461

研究課題名（和文）太平洋世界の人間と環境に関する比較文化的ポストコロナル研究

研究課題名（英文）A Postcolonial Study of Comparative Culture on the Humans and Environments in the Pacific World

研究代表者

須藤 直人（Sudo, Naoto）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60411138

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：民俗学者・柳田国男は、稲作・仏教・大和政権の移入・伸長により山奥に隠れた先住民（山人）の存在を説いた。山人は見つからなかったが、海が容易な逃亡を許さない太平洋群島世界の「孤島苦」の中で生み出された山人は、近現代の文学・文化に生き続けている。人間以外の存在や死者・霊・遺伝等とも結び付いた多様な形の先住民表象を、小説（森鷗外、芥川竜之介、宮沢賢治、坂口安吾、中島敦、新美南吉、遠藤周作）、マンガ（水木しげる、手塚治虫）、アニメーション（政岡憲三、宮崎駿）から読み取った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

稲作・仏教・大和政権以前の「先住民」は従来歴史学で扱われ、近年の縄文文化への注目や「縄文人と弥生人」といった形で一般的に関心が持たれてきた問題である。本研究はこの問題を近現代文学・文化研究に取り込み、文学研究と柳田国男（民俗学）を接続して新しいテキスト解釈を試みた。本研究が諸テキストから抽出した、逃亡が難しい孤島の先住民が外来の政治・宗教・テクノロジーに対して取る態度（恭順・帰順・面従腹背・殉死）や、人間以外の存在（自然・動植物・霊・神・妖怪）との協同関係は、ポストコロナル論・ポストヒューマン論の重要な論点であり、環境・AI問題における現代人の想像力の問題と繋がる。

研究成果の概要（英文）：The Japanese folklorist Yanagita Kunio argued that under the widespread impacts of rice farming, Buddhism, and the Yamato Imperial Government, there ought to have been some indigenous people who hid themselves deep in the mountains. These yamahito people were created in the “isolated-island suffering” of the Pacific Archipelagoes (including the Japanese chain of islands), where the seas forcibly prevent people from getting out. The yamahito people, Yanagita conjectured, had been still alive. Actually they could not be found out, but we can find them in contemporary Japanese literary and cultural texts, even in the forms of non-human entities such as gods, monsters, spirits, animals, and plants, as well as those of genetic human minds and souls. I delved into novels by Mori Ogai, Akutagawa Ryunosuke, Miyazawa Kenji, Sakaguchi Ango, Nakajima Atsushi, Niimi Nankichi, and Endo Shusaku; manga by Mizuki Shigeru and Tezuka Osamu; and anime by Masaoka Kenzo and Miyazaki Hayao.

研究分野：比較文学比較文化

キーワード：先住民 ポストコロナル ポストヒューマン 山人 海民 孤島 キリスト教

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の南洋植民地表象を、欧米の南洋表象及び南洋世界からの表象と比較考察した自著 *Nanyo Orientalism: Japanese Representations of the Pacific* (Cambria Press, 2010) を踏まえ、その発展を企図した。植民地帝国支配が植民地の動物・自然環境や先住民の生活・文化に与える影響を、文学テキストがどう表現しているかを扱った、最新のポストコロニアル文化研究が参考になった。

2. 研究の目的

日本列島から太平洋諸島に続く群島世界が大陸(文明の中心)から距離があるという環境条件や、そこでの自然環境と先住民の関わり方、植民地支配がそれに及ぼした影響、植民地の環境・先住民が植民者やその文化に及ぼした影響 これらの問題を文学テキストやマンガ・アニメ等のテキストがどう表現してきたかを明らかにし、群島世界での人間と人間以外の存在との協同関係について文化論的に考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 方法論として、「研究開始当初の背景」で述べたように、動物等の人間以外の存在や環境に着目して表象文化における植民地問題を扱う、ポストコロニアル文化研究(例えば、Graham Huggan and Helen Tiffin, *Postcolonial Ecocriticism: Literature, Animals, Environment*, Routledge, 2010)を参考にした。またこうした研究と密接に結び付く、人間と人間以外の存在との協同関係を問題にしたポストヒューマン論(Donna Haraway, *Simians, Cyborgs and Women*, Free Association Press, 1990; N. Katherine Hayles, *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*, The University of Chicago Press, 1999; Rosi Braidotti, *Posthuman Knowledge*, Polity Press, 2019 等)を参照した。

(2)(1)の方法論を日本列島~太平洋諸島の群島世界の文脈に応用することを試みた。まず国際連盟委任統治委員として日本の南洋諸島統治に関わった民俗学者・柳田国男に注目した。大和朝廷以前の日本列島の先住異民族が今も山奥に隠れ住んでおり、平地人には妖怪・精霊等の超自然的な存在と見なされてきたと説く山人論や、その周辺の漂泊民に関する論考、さらには南島に関する考察や委任統治委員としての経験等から得られた、南洋諸島のみならず日本自体を孤島と見なし、群島世界を身動きの取れない孤島苦世界と見る見方 こうした柳田民俗学の議論・視座を、近現代の文学テキストやマンガ・アニメの文化テキスト解釈に応用した。加えて、歴史学者・網野善彦等による「海民」研究、哲学者・柄谷行人の「遊動論」等を参照した。

4. 研究成果

(1) 先住異民族からの文化的影響の例として、中島敦(1909-42)の小説テキスト「夫婦」「夾竹桃の家の女」(いずれも1942年)を分析した。これらは、日本統治下に置かれた南洋群島ミクロネシアの統治機関・南洋庁コロールに赴任した中島敦が、帰京後まもなく戦時下で執筆したとされる作品である。前者はパラオの伝統家屋・集会所パイに描かれている絵物語の一つを下敷きとした昔話風の小品であり、後者は作者のパラオでの実体験に基づいたルポルタージュの体裁で書かれている。一見特に関連のなさそうな両テキストであり、パラオの珍奇な風俗の紹介文に見えるが、物語内容の類似点に着目すると、両者を合わせることで、日本の南洋統治に対する懐疑的な表現が浮かび上がる。日本統治以前は村落毎に建てられていたパイは、村落の神話・歴史・慣習・重要事件の継承や政策会議を秘密裏に行う場であり、そこに描かれた絵物語はいわば暗号の役割を果たしたと考えられる。この無文字社会の表現システム・文化を利用することにより、戦時下において、作者は見聞を記した中に、秘密裏に日本の植民地統治に対する批判的見解を暗号のように孕ませたのではないかと推察される。

(2) 柳田国男(1875-1962)は「遠野物語」(1910年)以前の論説の中で、キリスト教に敗北したギリシャの神々が山中に隠れて絶えたというハインリヒ・ハイネ(1797-1856)の説と平田篤胤(1776-1843)の幽冥論に触れながら、宗教以前の信仰(幽冥教)の存在と、現世と幽冥の交通を説き(「幽冥談」1905年)、神武東征以前の先住異民族が日本全国の山中に逃げ籠ってそのまま暮らしており、多くの日本人は天狗等の化物と見なし恐れていると説いた(「天狗の話」1909年)。柳田民俗学の初期において、山地と幽冥界、零落した神々・霊・妖怪と先住異民族が結びつき、平地人に畏怖・圧迫され絶滅していく彼らへの哀惜の念が表現された。先住異民族(山人)は見つからなかったが、こうした表現を我々は現代のマンガ・アニメに見出すことができる。

水木しげる(1922-2015)の人気マンガ「ゲゲゲの鬼太郎」の鬼太郎は「良い妖怪」の代表格として「悪い妖怪」から人間を守るというキャラクターだが、その前身作「墓場鬼太郎」(1960-64年)によると、鬼太郎は絶滅寸前の先住異民族の最後の末裔という設定である。そこでは鬼太郎は妖怪と区別され、同時に妖怪のように人間から見られている。「ゲゲゲの鬼太郎」として人気マンガ・アニメ化すると、滅んでいく先住異民族という設定が忘れられていった。

宮崎駿(1941-)監督・脚本のアニメ「もののけ姫」(1997年)には、蝦夷アイヌ、狼少女、山神、山の精霊といった、平地人に追いやられた存在の「山人」が集大成され、山人・山海民・平地人の交通が描かれた。平地人の様子を窺いながら日常は没交渉である山人、同じ漂泊遊動民と

して接触のある山人と山海民、対立しながら相互依存関係にある山海民と平地人の三層世界構造の描き方は、柳田国男の「遠野物語」(1910年)「山の人生」(1925年)に対応している。女性・癩病者も平等に扱われるたたら製鉄場の描写は、網野善彦が『無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』(1978年)等で論じたアジールの空間を参照している。

同じく宮崎監督・脚本の「千と千尋の神隠し」(2001年)では、主人公・千尋の「神隠し」は幽冥界・山の世界と現世・里の世界の往来に関する柳田の説に対応している。異界の住民である神々(山人・妖怪)と異なり、千尋と同様外来で、千尋の脱出を助ける少年ハクは、その名を饒速日に由来する。記紀の神武東征で強く抵抗した土豪ナガスネヒコ(山人)を殺して帰順する天津神が饒速日であることから、千尋は神武に相当し、鳥に変化する魔女姉妹は、八咫鳥、エウカシ・オトウカシやエシキ・オトシキといった兄弟豪族(山人)に当たると考えることもできよう。

(3) 柳田国男は「山人の研究」(1910年)の中で、山人は国津神と呼ばれたと説き、その零落を憐れむとともに、記紀の天孫降臨で天孫を先導する国津神・サルタヒコが山人のイメージとほぼ完全に一致し、しかもジェントルマンであることに注目している。「最初の帰順者」サルタヒコに焦点を当て、文学・文化テクストを再考した。

森鷗外(1862-1922)の小説「舞姫」(1890年)の主人公・太田豊太郎には、サルタヒコ(最初の帰順者)が投影されていると考えられる。国家官僚(陸軍軍医)森鷗外は医学(衛生学)・文学の両面で日本の「近代化」を企図した。従来太田豊太郎はほぼドイツ留学時の森鷗外自身とされ、森鷗外のドイツ留学時の体験記と見て現実がいかに作中に反映されているかが「舞姫」研究の中心であった。だが「舞姫」は教養小説・成長小説等と呼ばれるヨーロッパ近代小説ジャンルの系譜にあり、太田とエリスの恋愛は「アエネーイス」のアエネアスとディドーや、インクルとヤリコ、ジョン・スミスとポカホンタス等、よく知られた植民地異人種恋愛譚を受け継ぐものと言える。他方で「舞姫」はこうした「欧文脈」に対しての「和文脈」を配し、異化と同化のバランスを取っている。雅文体であること、「恋愛」(翻訳語)を使っていないこと等の他に、太田が(サルタヒコのように)大臣・天方伯(天孫・天津神)のベルリン来訪に應對し、ロシア訪問に通訳として随行案内するという神話的内容(天孫降臨・高千穂案内)を含んでいる。天の岩屋戸の神話で神憑りして舞う天津神ウズメは国津神サルタヒコの妻になったと言われ、エリスが「舞姫」であること(先行研究では、エリスのモデルとされる女性は必ずしも踊り子でなかったと言われている)や、太田と国際カップルとなることにも対応する(さらにサルタヒコの子孫は大田命である)自由恋愛を断念して忠義を取る太田は「帰順者」のイメージである。

戦時中に制作・上映された政岡憲三(1898-1988)監督・脚本のアニメーション「くもとちゅうりっぷ」(1943年)は、マザーグースの「クモとハエ」を下敷きに内容を変更したと思われる、横山美智子(1895-1986)の原作童話(1939年)をさらに改変し、時局に応じた神話的・寓話的表現を付加強調したと考えられる。花壇に現れた天道(=神・太陽)虫の少女を迎えて誘惑・威嚇する黒蜘蛛は minstrel・ショーのブラック・フェイスであり、最後に蜘蛛が嵐(神風)に吹き飛ばされて天道虫が救われるという物語表現・内容から、天道虫を日本、黒蜘蛛を米国のアレゴリー表現と見なすことができるだろう。他方、天道虫をアマテラス、天道虫が隠れるチューリップを岩屋戸、黒蜘蛛をスサノオとして受け取れると同時に、天道虫を天孫(ニニギ)チューリップを真床追衾、黒蜘蛛は天孫を迎え撃ったサルタヒコ(国津神=帰順した山人)と見ることができる。蜘蛛が大男であることや、最後に水に溺れるところもサルタヒコに類似している。恐ろしいが紳士風で滑稽でもあり哀れを誘う黒蜘蛛は、サルタヒコのイメージと重なる。

坂口安吾(1906-55)の「安吾の新日本地理 安吾・伊勢神宮にゆく」(1951年)は、伊勢神宮近辺の漁村に見られる、天皇家の日本支配以前の、征服しきれなかった民間信仰や生活の名残りに注目しており、柳田の山人論に通じる。伊勢五十鈴川周辺の有力者サルタヒコは、最初に天孫族に帰順し、ウズメを得て栄えた。そのため伊勢の海民は却ってサルタヒコを支持しなくなり、そのことが神話での悲惨な溺死に繋がったという。衢の神(辟邪神)として恐るべき実力を示し、天孫に忠誠を示したにもかかわらず、人望を失ったため、奇怪なピエロのような神話での扱いになった。伊勢海民(先住民)にとってサルタヒコは侵略者に色仕掛けで取り込まれた裏切り者である。この見方はポストコロニアルの視点からすれば柳田の山人論を補うものであり、「舞姫」の太田豊太郎や「くもとちゅうりっぷ」の黒蜘蛛を一層サルタヒコに近づける。

「くもとちゅうりっぷ」を少年時代に見て「米英撃滅もの」としか思えなかったという手塚治虫(1928-1989)のマンガ「火の鳥・黎明編」(1967年)は、記紀とは異なる形の国家形成の動態を描いた。記紀にある化外の先住民・狩猟採集民族クマソ(山人)を、ヒミコ(記紀のアマテラスと重なる)と弟スサノオが治める農耕民族ヤマタイが滅ぼし、さらにヤマタイはニニギ率いる騎馬民族・高天原族に滅ぼされる。ここでサルタヒコはヒミコに従順な勇猛・優秀な防人であり、記紀に記された天孫族への脅威と忠誠が形を変え再現されている。忠君にもかかわらず女王の命で拷問を受けて奇怪な容貌にされ、自ら滅ぼしたクマソの生き残りである少年イザナギを庇いながら、報国のため不利な戦いに挑んで死んでいく(義経を庇う弁慶のような)サルタヒコは、柳田の言う憐れむべき滅びゆく先住異民族(国津神=帰順した山人)のイメージである。ただし、

「火の鳥」では北米先住民パウハタン族ポカホンタスの伝説になぞらえてサルタヒコがウズメに助けられる場面があり、侵入されたパウハタン族と侵入した高天原族のイメージが重なる。これは一方ではポストコロニアルの視点に立つ、記紀の価値観に偏らない天孫族の捉え方であるが、他方同じく先住民の立場というポストコロニアルの視点に立てば、異議の出る内容であろう。

(4) 山人とは中央政府との服従・保護関係(日本人になること)を拒んだ人々である。柳田「山人外伝資料」(1913年)には、山人は時代を追って国津神、鬼物、山神・天狗、猿などと称されてきたとある。文学テキストでは権力との服従・保護関係から抜け出し、「山人になる」人物が描かれてきた。単に「山に隠れる」(山民になる)のではなく、また「発狂」でもなく、異なる存在に意図せずして変容する。(柳田のように)優秀な官吏であり詩人であるが挫折した李徴が虎に変わっていく、中島敦「山月記」(1942年)が代表例であろう。また柳田は宮崎県椎葉村の山民の生活に、先住異民族(山人)の思想「富の均分というがごとき社会主義の理想」が生きているのを見た(「九州南部地方の民風」1909年)。こうした発想で小説を書いたのが芥川竜之介(1892-1927)である。

芥川の短編小説「馬の脚」(1925年)には、馬に変わっていく男のことが語られる。北京駐在の平凡な日本人男性が突然死し、三日後に蘇生するが、両脚が栗毛の馬となっており、同僚や妻に「馬脚を露わす」ことを恐れて奮闘するも、次第に馬の本性が強くなって来る。馬の故郷である蒙古からの黄塵に誘われ、男は姿を消してしまう。この物語で「馬脚を露わす」のは実は医者、禁酒運動、マスコミ、家族主義であり、家族主義への疑念は(脚が馬である理由で自分を疎外する)家族・会社ひいては国家からの自由(山人化)を意味した。この実現が当時の新社会主義国家モンゴルに向かうことをテキストは示唆している。男の失踪=解放に結びつくのが、山人男の脚となる蒙古産の斃馬や、男にその脚を与えた幽冥界の満州族の存在である。「馬の脚」と対をなすと考えられるテキストが芥川「あばばば」(1923年)であり、主人公が通い付けのタバコ店の「白猫のような」人慣れない古いタイプの若夫人に関心を持つが、忽然と姿を消した後、赤子を抱いて母親という「図々しい」別の存在になって戻ってくる。店主である夫は不愛想、眇で不気味だが欲のない親切な人物であり、「馬の脚」の幽冥界の中国人等(山人)に相応している。芥川のテキストでは、山人ではないが山人のイメージと重なる人物が登場し、社会主義、福音書の内容等と絡めて、共同体から離れることが表現される。

芥川「玄鶴山房」(1927年)は一種の貴種流離譚であり、舞台は町中でありながら、山奥の空間にある「幻覚」(=玄鶴)を起こさせる。かつて画家・資産家として名をなし財をなした堀越玄鶴は、今や「玄鶴山房」と名付けた質素・風流な自宅の「離れ」で老いの病床生活を送る。大藩の家老の娘であった妻も身体の不自由な「ミイラ」(山姥)になり果てている。「山房」(文字通りには山家)の二人(先住者)は、病気や同居者(移住者=娘夫婦・孫・女中・看護婦)の喧嘩・嫉妬等に苦しむ、社会から孤絶した、身動きの取れない山人的存在である。玄鶴の葬式に訪れた親類は、リープクネヒトを読みながら上総の漁師町(海民の共産的生活)を想像している。直接山人や山の生活を表現してはいないが、柳田のいう「山人の思想」の文学的表現と言えよう。

(5) 柳田は「遠野物語」(1910年)で山人(山神・山男・山女・妖怪・動物)と山民との関係を語った。その後、山人は平地人との同化・混淆、討死、子孫断絶等により、ほぼ絶滅したとしながら、山人が努めて平地人を避ける一方、日本に多い夫人・子どもの神隠しは山人によるものと述べている(「山人考」1917年)。国際連盟委任統治委員として二年余りを過ごし、南島及び南洋群島を考える中で、陸続きの大陸国にはない海の拘束による山海の孤立、孤立ゆえの同族間の争いや階級差別、さらに「日本」そのものが実はそのような孤島世界であると述べた(「南島研究の現状」1925年、「島の話」1926年)。「山人」と「日本人」(山海民・平地人)は互いに畏怖・警戒あるいは拒絶しながら類似・混淆してもおり、「山人」間の争いや差別が存在する。こうした視点で、芥川竜之介、宮沢賢治、新美南吉の小説テキストを読み解いた。

芥川竜之介「トロッコ」(1922年)は「神隠し」に遭いかけた少年の恐怖体験であり、「神隠し」が山神によるところを、土工に憧れる少年が土工(山民)に付いて山に入ってしまう設定に変えている。「河童」(1927年)も同じ構造だが(作中で柳田「山島民譚集」のことが触れられている)、主人公は平和のため物質的・精神的欲望を減ずることの必要を河童の国で知る(谷崎潤一郎の作品を書き換えた「魔術」[1920年]では、これを精霊[山人]が教えている)。主人公は、帰還後河童(山人)の国を故郷と確信するほど感化され、やがて精神病と診断されるが、河童との交流は続く。

宮沢賢治(1896-1933)は1923年樺太を訪れた後「風野又三郎」を執筆し、未発表のままこれを1931年辺りに書き換えている(死後1934年「風の又三郎」として発表)。岩手山麓の小学校の転校生・風野又三郎は二百十日の風の精(山人)である。(山人について柳田が言うように)標準語を話す教員(平地人)には姿が見えないが、児童たちとは意思疎通ができる。人間に厳しい意見の又三郎が児童にたしなめられる場面もあり、これは宮沢の他の作品にも見られる。又三

郎には海民の特徴が見られ、行動領域は北洋から南洋まで太平洋世界にまたがる。「風の又三郎」は同じ舞台設定だが、風野又三郎（山人）は北海道からの転校生・高田三郎に変わり、高田三郎はその容貌と子どもの幻想においてのみ風の精であり、内地人への批判的な意見を述べることもない。扱われる地理的範囲は北日本に限られている。1930年代になり、柳田が先住異民族（山人）や漂泊民より「常民」「一国民俗学」を前面に出すようになることと軌を一にしている。

1932年1月『赤い鳥』掲載の童話・新美南吉（1913-43）「ごん狐」の狐「ごん」は何故人間に撃たれて死なねばならないのか。悪戯の報い、神や妖怪から害獣への変化といった従来の見方とは異なる答えを出した。当時は、「権狐」と題して投稿された新美の作品（1931年10月執筆）を『赤い鳥』主幹の鈴木三重吉（1882-1936）が改変して掲載したと言われる。「権狐」では兵十に撃たれた狐は「うれしい」気持ちで死んでいく。だが「ごん狐」では死んでいく狐の心情が表現されず、そのことで却って読者に心情を推察させるよい教材になったと一般に評されている。「権狐」で語られた狐の死の意味を考えるいくつかの手掛かりが、「ごん狐」では消されてしまった。「権狐」では、語り手はこの物語を元彌師の茂助（山民）から聞いたという（「ごん狐」では語り部・茂平は何者か分からない）。権狐は一貫して「権狐」と呼ばれ（= 仮の狐 = 擬獣化；「ごん狐」では「ごん」と呼ばれる = 擬人化）、山中で孤独に暮らす先住異民族（山人）であり、死んでいた鰻をヒサカキの葉の上に供える（蛇信仰；「ごん狐」では自ら咬み殺す）。兵十は無用の殺生をする百姓（平地人、半農半漁民）であり、「権狐」は山人・山民・平地人の三層構造からなる（「ごん狐」は狐〔動物〕と人間の二層構造）。狐は兵十の母の死を知って改悛したが、兵十がそのことを知るのには狐を撃った直後である。その時権狐が「うれしく」なるのは、兵十が自分を供養してくれて、結果孤独・差別を逃れて祖霊になれると期待するからであり、平地人・仏教徒とはいえ知多半島の海民出身である兵十が権狐と共通の、宗教以前の信仰（柳田国男の言う幽冥教・固有信仰）を持っているからである。「権狐」はアンデルセン「醜い家鴨の子」のキリスト教を幽冥教に置き換え、「ごん狐」とは異なる死の意味を伝えていた。

（6）柳田国男は「山の人生」（1925年）で一般的に山人に関する表現に不正確さ・誇張が伴うのを、「禁止時代の切支丹婆天連」に例えている。九州の山民には山人を恐れず彼らと交流をもった者もいたという。「禁止時代の切支丹」を描いた代表的作家・芥川竜之介、坂口安吾、遠藤周作（1923-96）のテキストでは「パテレン」と親しく交流をもつ者たち（キリシタン）は主に山海民である。棄教か殉教かを迫られて（記録上は）滅んだキリシタンたちは、平地人への帰順・同化が討死かを余儀なくされて滅んでいく先住異民族と重なる。

芥川は「西方の人」「続西方の人」（共に1927年）でキリストはボヘミアン、共産主義者であり、交流ある人物は漁師、売笑婦、税吏、罪人、貧者、奴隷といった人々（漂泊民）だと述べ、キリストは柳田から見れば「山人」である。「奉教人の死」（1918年）、「きりしとほろ上人伝」（1919年）、「じゅりあの・吉助」（1919年）等で異形の信者（山人）の殉教を描くのみならず、「るしへる」（1918年）では棄教者ハピアンと善心をもつ悪魔（山人）との問答を描いた。「神神の微笑」（1922年）では、あらゆる外来の思想文化を作り変える、山川森林に遍く潜む祖霊（山人）が宣教師オルガンティノを悩ませる。こうした祖霊の力は特に女性と結びつき、敬虔な信者の棄教を導いたり（「おぎん」1922年）持ちかけた信仰心を棄てさせたり（「おしの」1923年）し、マリア観音像という形で現代を舞台とする作品にも表れている（「黒衣聖母」1920年、「長崎小品」1922年）。祖霊の影響力は「報恩記」（1922年）では、強盗・投機・博打を行う海民信者たちの報恩告白のはずが、恩人への恐怖や憎悪が露わになるという形で描かれた。

中央権力に従わず平地人との同化を拒んだ先住異民族（山人）を、禁教時代の日本に潜入・布教し殉教した宣教師と重ねるなら、坂口安吾の「イノチガケ ヨワン・シローテの殉教」（1940年）はそのような山人たちを描くテキストと読める。前半部では続々と殉教していく宣教師・信徒たちの記録に触れ、後半部はシチリア出身のイエズス会宣教師ジョバンニ・パチスタ・シドッチ（1668-1714）と新井白石との問答が中心になる。逆に遠藤周作「沈黙」（1966年）は「穴吊り」の拷問を受けて棄教したという二人のイエズス会宣教師、最初の「転び伴天連」クリストヴァン・フェレイラ（1580-1652）（シドッチを除く）記録上最後の潜入宣教師ジュゼッペ・キアラ（1602-85、日本名岡本三右衛門、テキストでは主人公セバスチャン・ロドリゴ）に焦点を当てる。裏切り者の信者キチジローと合わせ、殉死できなかった彼ら「弱者」を、キリストは見守り寄り添い許す。「イノチガケ」での新井白石・岡本三右衛門・シローテ（シドッチ）の関係は「沈黙」の井上筑後守・フェレイラ・ロドリゴ（岡本）の関係に等しく、「イノチガケ」のシローテ・長助（奴婢）の関係は「沈黙」のロドリゴ・キチジローの関係に相当している。「沈黙」では（芥川が表した）祖霊（山人）は「沼」と表現されている。祖霊と親しい海民キチジローは、踏絵を踏んでは告解して許しを請い信仰を続ける。祖霊はフェレイラを介してロドリゴに棄教させた後、キチジローを介して面従腹背の道を教えたと解せよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 須藤直人	4. 巻 101号
2. 論文標題 パラオ絵物語と中島敦の南島譚：無文字社会文化の文字テキスト化	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 比較文学研究	6. 最初と最後の頁 245-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----